

ディルタイにおける経験と学の関係

—宗教的体験と宗教学の関係を題材として—

入江 祐加

(和文要旨)

本稿の目的は、宗教的体験をひとつの人間の経験として分析的に扱い、そうした宗教などの経験をディルタイが学としていかに経験的に捉えようとしたのかを明らかにし、彼の学の基礎づけの仕事が最終的に倫理の構築に向かって進むことを考察することである。たとえば人間と宗教の関係は神話、神殿と聖地、墓、殉教者の記念碑、神像と礼拝の道具、宗教音楽と宗教絵画等の生活に反映されている。そういった互いに一致しない多くの異なった経験のなかで宗教そのものの本質や定義を客観的に研究するのが「宗教学」という「学」である。宗教学は教義・歴史・思想・世界観・役割等を第三者からみて客観的に観測可能な事例で科学的に研究し、宗教そのものを規定する。ディルタイは経験と学との関係を考察することによって、人間の生が客観的な学となる地点へ人間を導く。本稿は人間にとって不可視なものの探求であっても徹頭徹尾経験に基づいていることを明らかにし、それらが諸個人の目を開かせ、諸個人の考えを深める学として普遍妥当的な理想を開示することをディルタイに沿って分析する。

(SUMMARY)

The aim of this paper is to elucidate how the science of religion as “Geisteswissenschaft” can develop from empirical religious studies in Dilthey’s thought, and to show that the ultimate purpose of his philosophical work is the construction of ethics. For example, people express their religious beliefs in various ways, such as myths, temples, sanctuaries, tombs, cenotaphs from martyrs, statues, ritual implements, religious music, religious paintings, and so on. In these fruits of religious experience, the science of religion as “Geisteswissenschaft” seeks the objective essence and definition of religion. Religious dogma, history, thought, views of the

world, and roles, which researchers do scientific and objective research on, exemplify what religion is, and the science of religion as “Geisteswissenschaft” defines the essence of religion on the basis of these examples. Dilthey, who explored the relation between experience and science, found and revealed how objective “Geisteswissenschaft” can develop from human experience and human life. This paper shows that every study of “Geisteswissenschaft,” including things that are not seen, is radically based on human experience, discloses the universally valid ideal to deepen what people think, and enlightens them.

序

19世紀の哲学者、ヴィルヘルム・ディルタイ（Wilhelm Dilthey, 1833年–1911年）は精神科学を基礎づけるという課題に生涯を費やし、人間自身や、また人間によって作られた社会や歴史を認識する人間の能力の批判（「歴史的理性批判」）を完成させようとした。彼は人間の経験をあるがままに捉えることから精神科学の学のあるあり方を明確化し、人間の時間、文化、社会、生世界、客観的精神、主観的パースペクティブを深化させることによって精神的な営みの重要かつ本質的な部分を言い表そうとした。こうした人間そのものの経験から出発するディルタイの探求を振り返ると、経験的理解の限界を越えている宗教などの問題が正面から議論されることは少ない。彼の精神科学における経験的な探求のなかで、たとえば超自然的な力や存在に対する観念の考察、あるいは神霊などの崇拜対象とそのような体験から現れるような神々しさ、清浄感、神聖感、畏敬の念、神や超越者などの問題は別次元におかれていたのかという疑問が生ずる。しかし、このことに関して齋藤は、ディルタイにおける「自然を越えたもの（das Meta-Physische）」の経験の価値に対する考え方が分かっただけで、彼自身の広範な仕事の意味も十分に理解できると述べる¹。またディルタイの系譜を受け継ぐヘルマン・ノール（Herman Nohl）、オットー・フリードリヒ・ボルノー（Otto Friedrich Bollnow）なども、ディルタイの精神科学において、人間の感情のうちに自然の支配力

¹ 齋藤智志「忘れられた問題？—ディルタイの思索における宗教と神学—」、『ディルタイと現代—歴史的理性批判の射程—』、西村皓・牧野英二・舟山俊明編、2001年、159頁参照。なお齋藤はこのことに関して Nohl, H. *Theologie und Philosophie in der Entwicklung Wilhelm Diltheys*, in: *Die Deutsche Bewegung—Vorlesungen und Aufsätze zur Geistesgeschichte von 1770-1830*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1970, S.311 を参照している。

によっては脅かされることのない何かがあることが確かに叙述されていると主張する。こうした論考をふまえたうえで、精神科学の基礎づけにおいてあえて「自然を-越えたもの」のリアリティーを追及するディルタイの意図を分析し、そこから彼の経験的な探求を一層具体化させなければならない。実際ディルタイは比較宗教学者であるフリードリヒ・マックス・ミュラー (Friedrich Max Müller) の「人間は不可視なもの (das Unsichtbare) を実際に見ることができるという言い方があまりにも大胆に聞こえるとすれば、人間は不可視なものの圧力に気づくということにしよう。そしてこの不可視なものこそ、このように自然人が初めて接触するに至った無限者を表わす特別な名前にほかならない」² (GS I, S.137, 全集 I, 144 頁) という言葉を引用し、次のように言っている。

このように宗教的な心情のあり方を考察することによって、依存の経験と、自然から独立した高次の生の経験とが織り合わされている地点に、われわれはつねに連れ戻されるのである。(ibd.)

ディルタイはミュラーの言葉を考察することを通して、人間そのものの宗教的な心情のあり方を分析することの価値を強調する。人間そのものの宗教的な心情のあり方は神話、さまざまな諸民族の埋められた神殿と聖地、墓、殉教者の記念碑、神像とあらゆる礼拝の道具、宗教音楽と宗教絵画などの生活に反映されている。こうしたものを捉えることを通して、宗教そのものを規定し、自然を-越えたもののリアリティーに接近する道筋が確かに存在するとディルタイは考える。

このようにディルタイは人間の経験を越えたものや不可視なものにも経験から接近する道筋を考察する。ここから彼は宗教そのものの本質や定義を客観的に研究する「宗教学」と呼ばれるひとつの「学」を見定めようとし、そのことによって宗教そのものの本質や定義を客観的に研究する。ディルタイが比較宗教学者ミュラーの言葉に共感するのは、彼自身が生涯をかけた精神科学の探求において、こうした学と経験との密接な関係をテーマとしていたからに他ならないからである。

以上のことをふまえたうえで、本稿は宗教などの自然を越えたもの・不可視なもの

² Müller, F.M. *Vorlesungen über den Ursprung und die Entwicklung der Religion, mit besonderer Rücksicht auf die Religionen des alten Indiens*, Straßburg 1880, S.41.

をディルタイの精神科学がいかに客観的に規定しようとしたかを、ディルタイの経験的態度そのものと結びつけながら一層具体化させる。先行研究のなかでは、普遍妥当的な理想に向かって突き進むディルタイの態度と、人間の生から出発し解釈や歴史などの方法をうちたてながら経験的探究を推し進める彼の方法論とが乖離しているのではないかという疑問が呈されてきたが、本当に精神科学の基礎づけを行おうとするディルタイの経験的態度と普遍的態度は乖離しているのかを本稿は見定める。たとえばハンス・ゲオルク・ガーダマー (Hans-Georg Gadamer)³、エルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch)⁴などは精神科学の基礎づけにおけるディルタイの考察の態度が一貫していないこと、またそれによって彼自身が自らの目指す学を不完全にしか考察していないことを批判する。本稿はこうした批判をふまえたうえで、ディルタイにおいて普遍妥当的な目標に向かって歩を進めること自体が、経験および歴史とともに捉えられねばならないことを宗教的体験と宗教学の関係を題材として明らかにする。

はじめに大まかな見通しを立てておく。第1節では精神科学の基礎づけの方法をディルタイの記述に従って具体化する。そこでは生内部の自己省察から歴史的-社会的現実全体の知が内在的に形成されていく過程を追う。第2節では、第1節で考察した自己省察が人間の歴史や社会を自己の経験と同様に内面的に捉えようとするもののなかで開示されることを考察する。歴史や社会、文化の日常的な構造を人間の前に可視化する客観的精神の働きを分析し、「人間とは何であるか」という問いを人間の経験的観察から明らかにできることを考察する。第3節では、第2節で述べた客観的精神の考察の延長として、芸術・宗教・哲学など人間の認識にとっての最高の形成物をディルタイに沿って客観的精神として考察し、それらが人間といかなる関係を結び、また人間に対していかなる立ち位置をもって存在するかを明らかにする。ディルタイによると、神話や宗教は可視的なものすべてを超越するものとして君臨しているのではない。個々の宗教的体験を客観的精神とともに考察することによって、人間が自分自身で理

³ Vgl. Gadamer, H-G. *Wahrheit und Methode*, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen, Gesammelte Werke, Bd.1, 1986, S.222-246.

⁴ たとえば「ディルタイの構成は歴史科学・精神科学の理論を認識論的視点の下に求むるものであっても、哲学的視点に偏している」Troeltsch, E. *Renaissance und Reformation*, in: *Gesammelte Schriften* (vollständig in 4 Bänden), Mohr Siebeck, Tübingen, 1919, S.267)というトレルチの言葉にディルタイ批判が端的に表わされているといえる。ここでトレルチは、個人主義的主観主義(ディルタイ)による形而上学の解体が、再び新たな形而上学に陥る可能性を示唆している(a.a.O.266-267)。

解の限界を越えているものに経験を通して近づくことができることを考察する。第4節では人間が人間の経験のなかにさらに入り込み、経験がさらに観察されることによってひとつの普遍妥当的な理想が開示されることを明らかにする。精神科学の経験的な考察によって人間がまだ見ることのないものが教えられると同時に、人間そのものの目が開かれ、人間の本質が理解可能になる。最後に、経験的態度そのものにより深く入り込んでいくことを通して、ディルタイの精神科学の探求が人間そのものの生き方に影響を与える普遍妥当的な倫理を構築することに結びついていくことを明らかにする。

1. 「自己省察」—経験の立場を徹底させる精神科学の構築のあり様—

ディルタイは「精神科学」を基礎づけるという課題に生涯を費やした。精神科学とは日本の学問区分では人文科学と社会科学の双方を含む。1883年に彼は、『精神科学序説』第一卷（以下『序説』と略記）を公刊した。ブレスラウの地においてポウル・ヨルク・フォン・ヴァルテンブル伯（Paul Yorck von Wartenburg）と往復書簡など交流を深めながら思索を深めたこともあって、この著作もヨルク伯に勧められて刊行された。それゆえ『序説』の冒頭には、ヨルク伯への献辞とともに、社会研究と歴史研究の基礎づけの試みを「歴史的理性批判」と名付ける旨が記されている。「歴史的理性批判」とは、『序説』第一卷の刊行から最晩年の『精神科学における歴史的世界の構築』にいたるまで生涯全体を通したディルタイのテーマであり、彼の思想全体の問題であった。「歴史的理性批判」は本文中で以下のように定義される。

……課題は、まず精神科学を認識論的に基礎づけ、次いで基礎づけのさいに見いだされた補助手段を用いて、個別精神科学の内的連関、それらの精神科学における認識作用にありうる限界、それらの精神科学の真理の相互関係を規定することである。この課題の解決を歴史的理性批判、すなわち人間自身や、また人間によって作られた社会や歴史を認識する人間の能力の批判と名づけることができよう。

（GS I, S.116, 全集 I, 124 頁, 傍線は入江）

ディルタイが行おうとした精神科学の探求は、「生を生それ自身から理解する」という言葉で要約される。それは人間が考察の主体でありかつ客体でもあるという二重の在

り方で対象に入り込んでいることを意味している。自然科学は一般に自然界において本質的に重要な現象を観察し、現象の把握に有効な概念をうちたて、現象を支配する法則を発見する。自然科学の対象は人間にとって疎遠なものである場合が多く、それらが対象とする現象は把握する主体を超越している。他方で精神科学が対象とするものは、「諸個人、諸家族、構成されたさまざまな団体、国民、時代、歴史的諸運動、あるいは歴史的発展の連続、社会的組織体、文化の体系や、それら以外の人類全体からの諸断片であり—最後にこの人間そのもの」(GSVII,S.81, 全集IV,88 頁)である。精神科学は完全に主体から切り離された対象を問題としているわけでもないし、人間の外にある自然のごく限られた領域を問題にしているわけでもない。精神科学の対象は認識する当の人間そのものと深く関わっている場合が多い。従って精神科学において当の人間および認識の主体を全く度外視して社会や歴史のあり方を説明することはできない。精神科学の客観性は、把握される対象の確固とした現実性と認識する人間確固とした現実性との接触において成立する。

歴史的-社会的現実全体の認識は、われわれが直面した最も普遍的で究極的な精神科学の問題であり、認識論的自己省察にもとづく諸真理の連関のなかで徐々に実現される。その場合、まず人間の理論が構築され、その上に社会的現実に関する個々の理論が打ち立てられる。しかし、これらの理論は、個人の相互作用のなかで織り成されているありのままの歴史的現実のいくらかのものを説明するために、進歩しつつある真の歴史学に使用されるのである。(GS I ,S.95, 全集 I ,103 頁, 訳一部改訳, 傍線は入江)

ディルタイは歴史的-社会的現実のあらゆる現象を事実即したまま捉えるために、対象を主体そのものの意欲、感情、表象に即して経験的に分析する。そこで生の内的分析が推し進められる。こうした作業をディルタイは「自己省察 (Selbstbesinnung)」と呼ぶ。精神科学を構築する際に重要となることは、歴史的-社会的現実の対象を自己自身の経験にしたがってあるがままに理解し深化させていく自己省察という作業である。ディルタイによると人間は生を反省することなしに生を知ることはない。人間の理論や社会的現実に関する個々の理論は人間自身の生きた内面の反映である。精神科学は人間そのも

のの自己省察から社会や歴史の錯綜した対象や事実に接近し、記述と分析を繰り返すことにおいて自己の省察を究めようとする。

精神的世界で現れるそれぞれの自伝や伝記、諸国民、文化体系、組織の歴史は、デイルタイにおいて自然を把握するための手段であり、人間を理解するための手段であり、愛情に生き、結婚生活を送り、友人たちと生活するさいにその仕方を教えてくれるための手段であった。そうしたものは人間が自己自身を内部から理解するための道具（Organ）であった。こうした自己省察のなかで人間の理論が構築されると同時に、現存するさまざまな協働が精神科学のなかに反映される。デイルタイの精神科学は、生内部のさまざまな手がかりによって人間の自己自身を内部から観察し、完成した建造物の内的連関を発見するようにして精神的世界の組成的な全体を内部から明らかにする。

2. 社会や歴史の経験を経由することによって、人間が人間自身を再び見出すこと

前節で述べた「自己省察」は、精神的世界のうちで人間が人間を内部から理解するための方法のひとつであった。人間は人間自身の歴史や人間が作り出した思想を自己同様に内面的に捉える。また人間は歴史を通して自らの過去を認識し、社会や共同体のあり方を洞察することによって自らが何であるかを知る。

一方、こうした自己省察において個人的主体のみをその省察の出発点としたり、「自己（Selbst）」を個人的パースペクティヴのなかで捉えようとするのは誤りである。デイルタイの精神科学の基礎づけにおいて個人の問題は人間全体の問題と深くかかわっている。個人はいずれもこの歴史的-社会的現実という巨大な建造物の担い手であり、共同制作者であるとデイルタイは言う。それぞれの人間は自らの個人的な体験のみに閉じこもるのではなく、社会や歴史の全体を自分の認識のうちに捉えようとする。前節で述べた「自己省察」は個人の内省や想起から遂行されるのではなく、人間が自らの経験を他者や社会のあいだで価値あるものとして固定化させることによって遂行される。

人間はつねにその環境や身の回りの他者に対する連関のなかにおかれている。個人と個人、個人と文化体系、文化体系と共同体、共同体と共同体などのあいだにはさまざまな相互関係が合流しており、そこには広大な社会的-歴史的な作用連関が存在している。こうした作用連関のなかで環境そのものが主体に働きかけ、主体がそうしたさ

さまざまな作用を受け取ることによって、人間そのものの共通の地盤が共有される。それぞれの人間は、それぞれの人間の外部にある計り知れない社会や歴史の深みを経由して「人間とは何であるか」という問いに立ち返る。人間は理解のなかでの回り道（Umweg）を通して初めて自己自身を知るようになるとディルタイは言う（vgl.GSVII,S.87, 全集IV,95頁）。

言語、神話、宗教的な慣習、習俗、法律、外的組織において、全体的精神の産物が存在している。そこでは、ヘーゲルの言葉を借りていけば、人間の意識が客観的になっており、それゆえ分析に耐えるものになっている。もとより人間は、人間が何であるかを、自己についての沈思によってではなく、心理学的実験によってでもなく、まさしく歴史を通じて経験する。（GSV,S.180, 全集III,684-685頁, 強調は入江）

上記の引用は中期の『記述的分析的心理学についての理念』（1894年）の引用である。ここで述べられている内容は『精神科学における歴史的世界の構築』（1910年）で登場する「客観的精神（objektiver Geist）」の概念を先取りしている⁵。「客観的精神」とは、「個人相互のあいだに成立している共同性が感覚世界のなかで客観化された多様な形式」（GSVII,S.208, 全集IV,229頁）である。具体的に人間そのものの言語、風習、生の形式、生活様式、人間の歴史や社会の遺産、文化の表現などがディルタイにおいて客観的精神とされる。それらは人間の精神や人間の考え方をひとつの形として人間の前に表現しており、またそうした生の客観的な表出は人間の全体的精神そのものを捉えている。それゆえにそれらは客観化された精神であり、事実の因果関係を超えて人間そのものの精神を表現している。

客観的精神は、生のなかで人間の生そのものをひとつの形として「客観化する（objektivieren）」。そのことを通して、客観的精神は歴史や社会の深みを人間の前に開示する。たとえば言語、風習、生の形式、生活様式をディルタイは客観的精神と呼ぶ。それらが客観的精神と呼ばれるのは、それらが実際に人間そのものの歴史や社会、文化の日常的な構造を如実に反映しており、同時にそうした歴史や社会、文化の日常的

⁵大野篤一郎・丸山高司編『ディルタイ全集第三巻 論理学・心理学論集』、法政大学出版局、2003年、1006頁参照。

な構造を人間の前に可視化させているからである。それゆえ客観的精神は生を客観的に映し出す鏡である。またそれぞれの客観的精神は人間が人間そのものを理解するための迂回的手段となっている。客観的精神を捉えることにおいて、人間にとって「人間とは何であるか」という問いのもつ厚みと意味が人間そのもののなかで吟味される。客観的精神を捉えることにおいて人間の本質についての考察がひとつの知として人間そのものに還帰され、自らの自らに対する理解が人間そのものに対峙していくようになるのである。

3. 経験科学から最高の形成物を客観的に考察すること

前節でみた客観的精神の考察において、ディルタイは人間そのものの言語、風習、生の形式、生活様式などを客観的精神と捉え、そうした客観的精神を捉えることによって人間とは何であるかという問いに徐々に近づいていく道筋を考察する。もともと「客観的精神」はヘーゲル哲学において精神の発展におけるひとつの段階を言い表すものにすぎなかった。ヘーゲルは精神を主観的精神、客観的精神、絶対的精神に分類し、芸術、宗教、哲学を絶対的精神に分類した。一般に、芸術、宗教、哲学は、日常的な知覚や表象作用によっては遂行できないことを成し遂げ、日常的な営みとは一線を画す最高の形成物として人間の前に現れている。ヘーゲルはそれらを絶対的精神の一部とみなし、それらのなかに自己と絶対者の統一をみた。一方、ディルタイはそれらを産出されたもの・歴史的なものと考え、客観的精神のひとつとして分類する。両者の見解の違いを明らかにすることにおいて、最高の形成物が人間といかなる関係を結び、また人間に対していかなる立ち位置をもって存在するかが明らかになる。

実際、ヘーゲルが絶対的精神と呼んだこれら最高の形成物は、ディルタイにおいて以下のように客観的精神として開示され、経験的・歴史的に見定められる。たとえばギリシア人の叙事詩の時代から学問が登場するまでの期間、人間は自らの生きた経験のなかで自分にとって特別に意味があると考えた現象を信じていた。それは神話であった。しかし神話は可視的なものすべてを超出することのなかで生み出されたり、宗教の超越的な考え方のみに基づいて君臨しているわけではなかった。神話は実際に当時の人々の現実の接し方によって条件づけられていた。それらの経験は表象のうちに吸収されることは決してなかった。また神話だけでなく、古代から近代までにさまざまな諸民族の埋められた神殿と聖地、墓、殉教者の記念碑、神像とあらゆる礼拝の道具、

宗教音楽と宗教絵画があった。それらは見えないものを絶対化したり観念化する手段として人間の前に現存するのではなかった。それらは人間そのもののあり方を客観化し、超越者との関係を通して人間に自己そのものを教える道具（Organ）であった。

ディルタイによると人間にとって不可視なもの・自然を越えたものでさえ、経験そのものと無関係に位置づけられるわけではない。人間の全歴史を通して、不可視のもの・自然を越えたものは人々の現実の接し方によって条件づけられている。そしてそれらは生内部の素材や人間の心的生の表象とともにある。それゆえに宗教など人間の認識にとっての最高の形成物は、人間にとって生として現に存在し、生であり続ける。ディルタイの精神科学の探求は経験科学から最高の形成物を思弁的に考察する領域に入っていくかのようにみえるが⁶、実際はその思弁は徹底して生内在的なもので、人間の生の経験から見出される。ここから最高の形成物に関する人間の意識は、人間が自分自身で理解の限界を越えているものに経験を通して近づいた過程とともに捉えられることが明らかになる。

このようにして、体験、理解、詩、歴史から、生についての一つの直観（eine Anschauung）が現われてくる。この直観はつねにこれらの内に、これらとともにある。省察は、この直観を分析的な明確性と明晰性に高めることにほかならない。世界と生についての目的論的な考察は、生についての、一面的な、偶然的ではないが部分的な見方に立脚した形而上学であることが認識されている。生の客観的な価値についての教説は、経験可能なものを越える形而上学である。（GSVII,S.291, 全集IV,329 頁，強調は入江）

ここでディルタイは、「生の客観的な価値についての教説は、経験可能なものを越える形而上学である」と述べている。一般に形而上学は「自然を越えたもの」という名称を与えられ、それを探求するものは現象的世界を超越したものや絶対的な存在者を思弁的思惟や知的直観によって探求する。しかしディルタイにおいて、形而上学はひとつの経験の過程である。実際、彼の自己省察は人間そのもののあり方を客観化し、そ

⁶ たとえば Gadamer, H-G. *Wahrheit und Methode*, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen, *Gesammelte Werke*, Bd.1, 1986, S.230f. S.241, S.243 参照。ガダマーは『真理と方法』のなかで、ディルタイの思弁的態度をヘーゲルの形而上学的態度と重ね批判している。

の省察を個人の前に際立たせることによって、人間に自己自身の目を開かせ、自己自身の考えを深めさせる役割を果たしていた。こうした自己省察から見定められる生の客観的な価値についての教説 (die Lehre) は人間そのもののあり方を如実に表し、またそうした教説は人間の自己自身に対して自覚的に対峙する。それは見かけ上経験可能なものを越える形而上学として人間の自己自身を導く役割を果たすのである⁷。

4. 人間そのものの生の経験を反映しながら人間に向き合っている知性

経験的な自己省察そのものから生そのものを如実に表現するひとつの知性が生み出される。これを前節でディルタイは「経験可能なものを越える形而上学」と呼んだ。ここから分かる重要なことは、ディルタイ自身が精神科学の基礎づけにおいて、人間の自己自身を内的に省察しながら人間自身に向き合い、人間自身に適合する体系を構築することを課題としたということである。ここでも自己省察が重要な役割を果たしており、彼の精神科学の基礎づけは自己省察が経過していくのに伴って内部から具体化される。人間自身の過程に追従することを通して、体系の変化に富んだ多種多様性のなかに構造や連関、配列を内的に発見する歴史的な自己分析の方法を彼は「歴史的自己省察」と呼ぶ。たとえばディルタイは歴史における宗教の発展と呼ばれるものが、宗教研究のための材料であると考え、歴史からそれに接近していく道を開く。すなわち宗教の表象それぞれが歴史をもっており、宗教と関わってきた人間の全過程を分析することによって、宗教の共通の本質が明らかにされる。そうすることによって生じる明証性に、判断の客観性を含んでいる確信感情が加わる。あらゆる知識にとって、ということは宗教学にとっても第一に必要なのは、自らの思考を意識化したもののなかで自らを解明することである。こうして学は人間の自己省察から生み出され、自己省察は人間そのものを如実に

⁷アルフォンス・デゲナー (Alfons Degener) は哲学的に問うことが形而上学的になり、この重みが問題のもつ最終的に到達可能な広がりや深みに迫り、非合理的な深みと解きがたさに肉迫すると考える。デゲナーの考察から、ディルタイにおける不可視なもの探求は哲学することに備わる経験的な性格であることが明らかになる。それゆえ、ここで言われる「生の客観的な価値についての教説は、経験可能なものを越える形而上学である」とは一般的な形而上学とは異なり、人間が覆いやヴェールを身につけていない自然過程そのものの認識を認めることに成功したときに、人間精神の探求におけるひとつの終着点として人間自身の前に現れるものであると考えられる。Vgl. Degener, A. *Dilthey und das Problem der Metaphysik*, Bonn/Köln 1933, S.16-21. またデゲナーの考察を用いてディルタイの形而上学批判を考察している次の論文も参照。大石学「ディルタイの『形而上学』批判—その再解釈の試み—」, 『ディルタイ研究』, 2005年, 第16号, 126-151頁。

表現したものを長い歴史的過程において普遍妥当性にまで高める。そのことにおいて学は人間自身をも制約するような価値段階を産み出していくとディルタイは述べる。

最後に、われわれが行為の根拠を普遍妥当的な理想のなかに、つまりわれわれの念頭に浮かぶ完全性のなかに見つけることによって、われわれの生存がわれわれに向かい合う。それは、芸術家が大理石から形づくるよう強いられている像が、芸術家に向かい合うのと同様である。(GSX,S.110, 全集VI,185 頁)

ここで「普遍妥当的な理想」とは、経験的な探求のなかで精神科学がその都度人間そのものに開示してきた人間そのもののあり方に関する理想である。生のなかでは互いに支え合い、道徳的世界のなかでは互いに戦い合いながら、歴史のなかで理論が理論に対立して、知的総合が果たされる。現実の異なったものすべての制約された事実が自己省察から見出された学のもとでその統一をなす。こうして生まれた「まったく欠けることのない実在」が人間自身の生活に影響を与え、人間に向かい合って存在し、人間を自律に導く。

体系哲学を基礎づけるのは自己省察である。つまり意識の諸条件の認識であり、いかなる精神の高まりのもとでも普遍妥当的な規定および普遍妥当的な認識や普遍妥当的な価値規定や目的行為の普遍妥当的な規則に従って自律 (Autonomie) に至ることである。(GSVIII,S.188f. 全集IV,610-611 頁, 強調は入江)

ここで言う「自律」とは、人間そのものの自己省察から見出された普遍妥当的な認識や規則にしたがって、他からの支配・制約を受けないで行動すること、また自己自身で立てた規範に従って行動することであると考えられる。この条件は人間が自らの意志で行為し思考していくための究極的な条件となる。芸術家が大理石から形づくるよう強いられている像が芸術家に向かい合うように、経験から出発して最終的に学がいかにして人間に向かい合うかを分析することによって、学の真の認識が人間そのものの自己自身に対して鋭い要求を突きつけることが分かってくる。ここからディルタイの精神科学は最終的に倫理的な要求を人間に開示することが明らかになる。重要なことは、こうした普遍妥当的な理想は目的志向的な思想のなかにはなく、人間の自己経

験を捉えることのなかにあるということである。普遍妥当な理想は人間に自覚的に向き合い、それは生そのものを如実に表す教説として人間そのもののあり方を人間に教えている。

ディルタイにおいて精神科学の体系は、人間の経験の表現であるとともに人間から独立に存在する大いなる実在の表現であった。人間は自らの経験によってそうした大いなる実在に到達し、それを確証する。重要なことは、ディルタイにおいて体系は、経験の範囲内で目に見えるものすべてを表すのみでなく、包含してもいないし到来していない経験のすべてにも対応するようなものでなければならないということである。彼において学は、人間が自分自身で理解の限界を越えているものに経験を通して近づいた過程とともに捉えられる。

以上のことより、経験的な探求のなかで人間が振り返って自分自身に視線を投げかければ、人間が自らの意志で知覚、快、衝動、そして享受の連関を打ち破り、その人間がもはや安住することさえもしなくなったところに、ある時点で人間から独立したひとつの生の実在が見出されることが分かる。ここで実在とは、われわれがそう思うからそこにあるように見えるというものではなく、人間自身と離れて別に客観的に存在し、人間そのものを導く教説となるものである。ディルタイが精神科学のなかで見出す「自然を越えたもの」のリアリティーはこうした実在であると考えられる。重要なことは、経験的な探求のなかで人間の生の理解が人間そのものを超えて客観的になるところまで深められていくということである。精神科学がひとつの「教説」として人間そのものに関係し、倫理的な役割を提示する成り立ちがここに説明されている。

以上のことより、人間の宗教的心情のあり方を考察し、宗教の教義・歴史・思想・世界観・役割等を第三者からみて客観的に観測可能な事例で研究する方法をうちたてることにおいて、此岸の世界にひとつの知性として人間に向き合うものが構築されることが分かる。そして、そうした知性によって人間の自己自身が超克されていく過程をディルタイは確かに捉える。ディルタイの精神科学において、経験的な探求のなかであえて超越性へ眼を向けること、また心のなかの彼岸によって自分自身の心を満たすことそのことが、この世界を受容し、この世界を克服し、この世界に向けて行動することと結びついていく。ディルタイの精神科学において、経験から捉えられた真の認識そのものが人間自らを制約し、人間自らを解放する。これが彼の精神科学の構築の実践的な意義の内実であるといえる。

結語

本稿は、精神科学の客観性は諸事物そのものとの交わりをあるがままに観察する自己省察のなかで導かれることを考察した。こうした精神科学という学のあり方を考察していくことに従って、経験として与えられているものを正しい方法で哲学的に理解するというところに大きな難しさが発見される。しかし、ディルタイは生を生そのものから捉えることを通して歴史や社会の深みを人間の前に開示する。芸術、宗教、哲学といったものでさえも客観的精神であり、それが人間の経験とともに捉えられることにより、人間が人間の日常の経験を超えているもの・不可視のものの圧力に気づくことが可能になる。そして、そこから人間そのものの普遍妥当的な理想を構築する道が開かれる。

本稿はディルタイの精神科学の基礎づけにおいて最高の形成物が人間に対していかなる立ち位置で存在し、人間に対していかなる役割をもって存在するかを考察した。彼は最高の形成物でさえもひとつの客観的精神として分析し、それらに客観的に近づいていく道筋を発見しようとする。そうすることのなかで、人間そのものの普遍妥当的な理想に至る道が開示され、生の自己省察が人間自身を制約するような価値段階を産み出していくことが明らかになる。普遍妥当的な理想は、ディルタイにおいて経験的態度の深化と拡大によってより強固に規定される。それは人間の最高の意識状態の反映として人間そのもののあり方を人間に開示していくのである。

一方、ディルタイのそうした普遍妥当的な理想の追求を、ガーダマーが「検証可能性が欠如した非方法的な帰納法」⁸と言って批判したことも事実である。しかし、そうした批判は人間自身の経験のなかで自然を越えたもの・不可視のものが響きつづけている事実を一切無視し、そうしたものに近づいていく道筋を一切認めないことにもつながるのではないか。そうした考察は経験そのものの可能性を矮小化することにつながるであろう。本稿では、ディルタイが経験的な観察から自らの精神科学の目指す方向を規定していく過程を考察した。実際、彼のそうした経験への信頼が宗教などの超自然的な力や存在に対する観念を学的に考察させることを可能にさせた。こうした彼のオプティミスティックな態度や経験への信頼を今後さらに検証し、整理し、意義づけることが求められる。

⁸ Vgl. Gadamer, H-G. *Wahrheit und Methode*, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen, Gesammelte Werke, Bd.1, 1986, S.246.

凡例

『ディルタイ著作集』(Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Vandenhoeck und Ruprecht, 1913-2006)からの引用箇所や参照箇所の指示にさいしては、巻数をローマ数字で、頁数をローマ数字あるいはアラビア数字で表わし、()に入れて本文中に示す。さらにドイツ語の引用箇所のあとに邦訳のページ数を付す。翻訳は法政大学出版局『ディルタイ全集』全11巻を参考にし、必要に応じて入江が改訳した。

キーワード：

精神科学、宗教学、客観的精神、自己省察、形而上学

Keywords:

human science, the science of religion, the objective spirit, self-reflection, metaphysics

